

機能動詞結合における対格目的語と その補足語の語順について

羽根田 知 子

I 目的語としての補足語と述語補足語

文は文の核である述語 (Prädikat) とその他の文肢 (Satzglied) から成り立つ¹。述語は単一成分から成る場合と複数成分から成る場合がある。単一成分から成る場合とは、現在または過去時制で単一動詞あるいは非分離動詞の人称語形のみによって述語がつくられるときであり、複数成分から成る場合とは、人称語形と人称変化しない形態の合成によって述語がつくられるときである。具体的には助動詞＋過去分詞、助動詞＋不定詞、動詞＋分離前つづり²である。これらは独立文において文末に位置するのが特徴的で、第1の述語成分である人称語形に対して第2の述語成分と呼ばれる。一方、文肢には構成的 (konstitutiv) な文肢と自由 (frei) な文肢がある。構成的な文肢とは、動詞の結合価 (Valenz) によって述語に結び付く成分であるが、それらがすべて文中に表れるという意味ではない。例えば次の文の対格目的語はどちらも動詞の結合化によるが、上の文では義務的、下の文では任意である (Duden Bd. 4, S. 651)。

Der Gärtner bindet *die Blumen*. (構成的な文肢で義務的)

Der Bauer pflügt (*den Acker*). (構成的な文肢で任意)

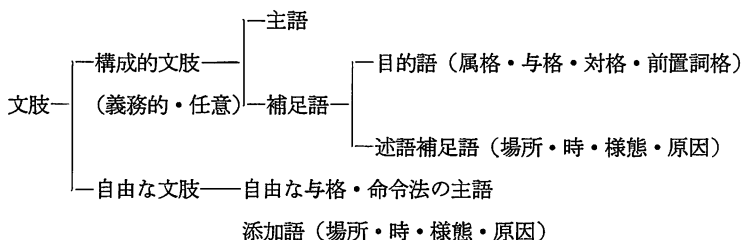
同一の動詞であっても、どういう意味の述語として用いるかによって、結合価の数や種類が変わることもある。例えば *gehen* という動詞は「(どこかへ) 行く」という意味の述語として用いる場合は方向規定が必要であるが、「歩く」という意味の述語として用いる場合は必要ではない。また、場所を表すということでは同じ副詞でも、構成的な文肢の場合もあれば自由な文肢の場合もある。

Ich wohne *in Berlin*. (構成的な文肢で場所の補足語)

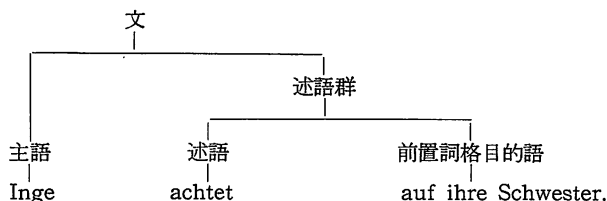
Ich will *in Berlin* meinen Freund besuchen.

(自由な文肢で場所の添加語)

構成的文肢で主語以外のものを補足語という。補足語には述語を成す動詞の格支配を受けるものと、格支配を受けずに述語としての働きを補うものがあり、前者は目的語、後者は述語補足語と呼ばれる。普通、両者を合わせて補足語と言うが、述語補足語のみを補足語と言うこともある。文肢を分類すると次のようになる。

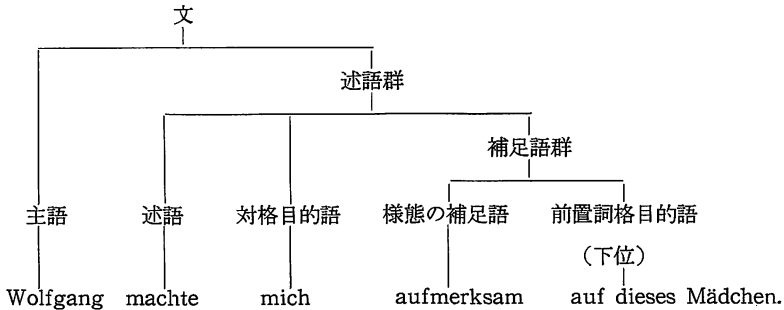


ドゥーデンの基本文型 (Satzbaupläne) では、述語と補足語のまとまりを述語群 (Ergänzungsverband) と呼んでいる (Ibid., S. 651ff). 例えば Inge achtet auf ihre Schwester. という文は次のように図式化される。



補足語 (主に述語補足語) が自身の結合価によってさらに補足語 (主に目的語) を要求することがある。これは下位 (zweiter Grad) の補足語と呼ばれ、上位 (erster Grad) の補足語とともに補足語群をつくる。例えば Wolfgang machte mich aufmerksam auf dieses Mädchen. という

文の mich と aufmerksam は動詞 machen に依存しているが, auf dieses Mädchen は aufmerksam に依存している.



II 機能動詞構文の意味成分の範疇について

形容詞にも結合価があるように名詞にも結合価がある。例えば Sie nahm Anstoß an seinem Benehmen. 「彼女は彼の態度に腹をたてた」という文において前置詞句 an seinem Benehmen は Anstoß に依存している。その点から言えば nehmen の補足語である対格目的語がさらに自身の補足語として前置詞格目的語を要求しているということになる。しかし一方で Anstoß nehmen は、動詞本来の意味が希薄になった機能動詞 nehmen と実質の意味を担う部分 (Hauptsinträger, 以下「意味成分」) である Anstoß が固定されて意味的統一体を成しているの、意味上は一つの述語をつくっていると考えられる。すると述語としての機能動詞結合が自身の補足語として前置詞格目的語を要求しているとも言える。しかし統語上は Anstoß が第2の述語成分の位置に現れていない。このような機能動詞構文はドゥーデンの基本文型ならばどれに組み入れられるべきであろうか。また組み入れられるのであろうか。まず機能動詞結合を語形の上から観察してみる。下の〔 〕は機能動詞結合 (ここでは機能動詞+意味成分) を一つの述語とした場合の補足語である (与格が関わる構文は省略する)。

1. 意味成分が目的語であるもの

- (1) 他動詞 + 対格目的語

Seine Rede fand viel Anklang³.

「彼の演説は多くの共感を得た」

- (2) 他動詞 + 対格目的語 + 〔前置詞句〕

Sie nahm Anstoß an seinem Benehmen⁴.

「彼女は彼の態度に腹を立てた」

2. 意味成分が前置詞句であるもの

- (3) 自動詞 + (方向性あり／なし) + 前置詞句

Das geht in Ordnung. (『アポロン』 S. 988)

「かしこまりました」

Das ist in Ordnung⁵.

「承知した」

- (4) 他動詞 (方向性あり／なし) + 〔対格目的語〕 + 前置詞句

Er hat das Fahrrad wieder in Ordnung gebracht. (*Duden* Bd. 2, S. 511)

「彼は自転車を修理してまた使えるようにした」

Du hältst deine Kleider gut in Ordnung. (Ibid.)

「君は衣服の始末が良いね」

このタイプを(3)との関係で見ると、(3)の方向性の有無は現れず、他動詞の方向性の有無のみが現れる。というのは組み合わせとしては次の四つが考えられるが、(4)のタイプで表現できるのは a. と d. であって b. と c. は表すことができない。

- a. 「これから処理される」という状態へもっていく場合
et. dazu bringen, in Ordnung zu gehen
- b. 「その時点で処理されている」という状態へもっていく場合
et. dazu bringen, in Ordnung zu sein
- c. 「これから処理される」という状態に保つ場合
et. darin halten, in Ordnung zu gehen
- d. 「その時点で処理されている」という状態に保つ場合
et. darin halten, in Ordnung zu sein

- (5) 自動詞 (方向性あり／なし) + 〔前置詞句〕 + 前置詞句

Er ist mit der Aufarbeitung dieser Akten zwei Tage in Verzug geraten⁶.

「彼はこれらの書類処理を二日間滞らせた」

Mit diesem Projekt ist die Forschungsgruppe bereits sechs Monate im Verzug. (Ibid.)

「研究チームのこの企画は半年も遅れている」

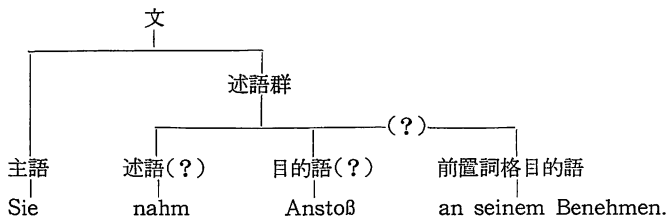
(6) 他動詞 + [対格目的語] + [前置詞句] + 前置詞句

Diese Ausstellung brachte uns mit dem Expressionismus in Berührung. (*Duden* Bd. 2, S. 133)

「この展覧会で私達は表現主義というものに触れることができた」

ドゥーデンの基本文型は主文型 (Hauptpläne) と副文型 (Nebenpläne) に分けられている (*Duden* Bd. 4, S. 654ff.). 主文型とは下位の補足語を持たないもので23の文型がある。副文型とは下位の補足語を持つもので9文型、さらに所有の3格が現れるものが別に設定されていて5文型ある。上で観察した機能動詞結合は、どの文型に相当するであろうか。タイプ(2)の文例 Sie nahm Anstoß an seinem Benehmen. を例にとりて、それに近い文型13を当てはめようとする、次の(?)の箇所が問題となる。

文型13 主語 + 述語 + 対格目的語 + 前置詞格目的語
 Die Helfer verteilten die Lebensmittel an die Flüchtlinge.
 (Ibid., S. 662)



前置詞句は前述の通り Anstoß に依存しているが、文型13ではこれと並んでしまう。また一成分から成る述語とその対格目的語という関係にも問題がある。もし一成分の述語であればその目的語を質問の対象にすること

ができるが、機能動詞結合においてはそれができない⁷。

Was verteilen die Helfer an die Flüchtlinge?

—Die Lebensmittel.

*Was nahm sie an seinem Benehmen?

—*Anstoß.

他のタイプも観察してみよう。タイプ(1), (3), (4)については、それぞれ次の文型に相当するように見える。

文型2 主語 + 述語 + 対格目的語

Der Gärtner bindet die Blumen.

(1) Seine Rede fand viel Anklang.

文型7 主語 + 述語 + 場所の補足語

Das Buch liegt auf dem Tisch.

(3) Das ist in Ordnung.

文型14 主語 + 述語 + 対格目的語 + 場所の補足語

Ich hänge das Bild an die Wand.

(4) Er bringt das Fahrrad in Ordnung.

Was bindet die Gärtner? — Die Blumen.

*Was fand seine Rede? — *Viel Anklang.

Wo liegt das Buch? — Auf dem Tisch.

Wo ist das? — *In Ordnung.

Wohin hängst du das Bild? — An die Wand.

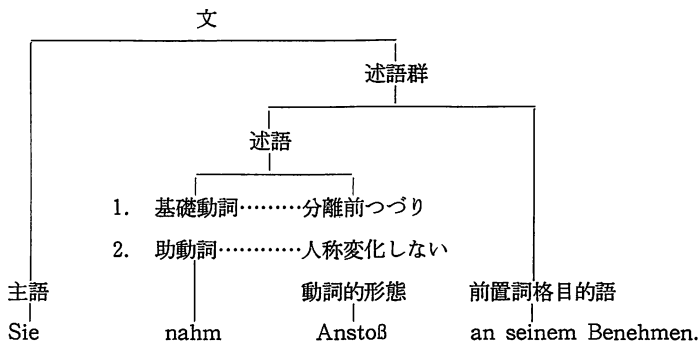
Wohin bringt er das Fahrrad? — *In Ordnung.

このように機能動詞は単独では述語をなさないという点でもタイプ(2)に文型13を当てはめることには問題がある。では、機能動詞結合を一つの述語とみなしてはどうか。前置詞句の部分はその述語の前置詞格目的語として質問の対象にすることができる。

Woran nahm sie Anstoß? — An seinem Benehmen.

文型5 主語 + 述語 + 前置詞格目的語

Der Arzt achtet auf die Meßwerte. (Ibid., S. 657)



この場合、複数成分から成る述語において人称語形と結び付く第2の述語成分としては、分離前つづりの他に人称変化しない動詞的形態 (infinite Verbformen) も考えられる。ここでは機能動詞結合の意味成分を分離前つづりとみなすことの問題点を明らかにしたい。

前出(1), (2), (3), (4)の機能動詞結合の構造はそれぞれ次の合成動詞と成句に似ている。

	名詞	+	動詞		前置詞格目的語	+	名詞	+	動詞
合成語	statt		finden		an et. ³		teil		nehmen
(1)	Anklang		finden		(2) an et. ³		Anstoß		nehmen
	副詞句	+	動詞		対格目的語	+	副詞句	+	動詞
成句	zugrunde		gehen		et.		zustande		bringen
(3)	in Ordnung		gehen		(4) et.		in Ordnung		bringen

構造が似ているとはいえ、機能動詞結合における意味成分は、動詞の前つづりにはならない。合成語になるものとならないものとは何が異なるのであろうか。

合成語が名詞+動詞の場合、その名詞部分は上例の stattfinden, teilnehmen のように動詞の対格目的語と考えられる場合と、eislaufen, maschineschreiben のように場所や方法の任意添加語に現れる名詞と考えられる場合がある。対格目的語や添加語が動詞と合成されて一概念化されるということは、独立した文肢としての性質を失うということであるから、もはや質問の対象にすることはできない。(次の矢印は歴史的に徐々にそ

うなつたとは限らない)

対格目的語 + 述語 (他動詞) → 述語 (自動詞)

seine/die Statt finden → stattfinden

Die Aufführung findet heute abend in der Aula statt.

(Duden Bd. 2, S. 646)

*Was findet die Aufführung heute abend in der Aula?

— *Statt.

場所の添加語 + 述語 (自動詞) → 述語 (自動詞)

auf dem Eis laufen → eislaufen

Er läuft eis seit mehreren Jahren. (『独和大。』 S. 611)

Wo läuft er? — *Eis.

対格目的語 + 場所の添加語 + 述語 (他動詞) → 述語 (他動詞)

et. im Topf glühen → topfglühen

jn. ins Heim führen → heimführen

道具の添加語 + 述語 (自動詞) → 述語 (自動詞)

mit/auf der Maschine schreiben → maschineschreiben

mit dem Schlitten fahren → schlittenfahren

mit dem Rad fahren → radfahren

mit dem Auto fahren *autofahren

mit dem Fahrrad fahren *fahrradfahren

Ich bin seit vielen Jahren nicht mehr radgefahren.

(Duden Bd. 2, S. 538)

Womit bist du nicht mehr gefahren? — *Rad.

分離の際には慣用句として現れるもの

mit der Maschine schreiben → jemand schreibt Maschine.

mit dem Schlitten fahren → jemand fährt Schlitten.

mit dem Rad fahren → jemand fährt Rad.

慣用句のままであるもの

in den Schlittschuhen laufen → Schlittschuh laufen

mit dem Auto fahren → Auto fahren

慣用句にもなっていないもの

mit dem Fahrrad fahren *Fahrrad fahren
 対格目的語 + 道具の添加語 + 述語 (他動詞) → 述語 (他動詞)
 et. mit/auf der Maschine schreiben → maschineschreiben

Womit schreibst du den Brief?

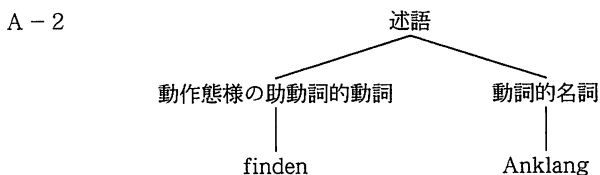
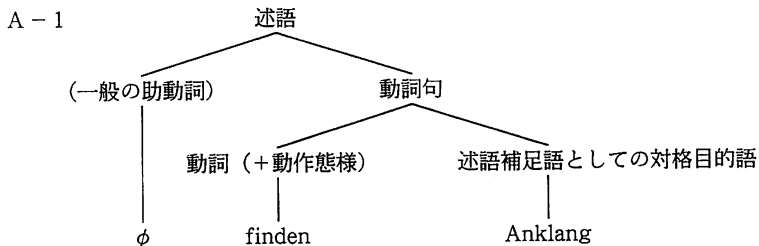
— *Ich schreibe ihn Maschine.

合成動詞になるか慣用句にとどまるかは、構成要素である名詞と動詞の一概念化の程度によると思われる。慣用句における名詞も、文肢としての資格が薄れ無冠詞になっているという点では合成語と同様であるが、その程度が異なっている。

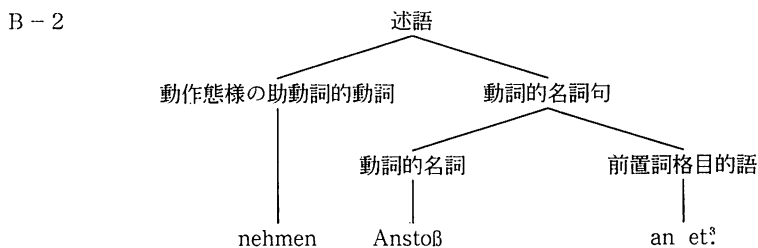
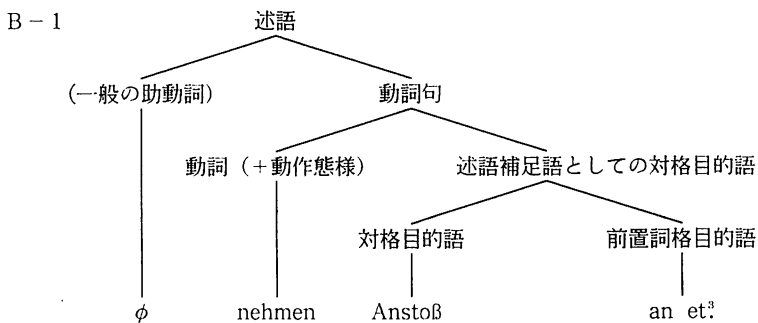
副詞句 + 動詞から成る成句の副詞句を形成している前置詞と名詞に関しても同様で、もとの名詞の意味が希薄になるなど、名詞として感じられなくなることが一語書きされる条件である (zugrunde, abhanden, zustatten 等)。

合成語や慣用句は、その構成要素である名詞と動詞の一概念化の程度には差があっても、その方向は同じである。しかし、成り立ちにおいて同じ構造をもつ機能動詞結合は、一概念を表しているという点では同じであるが、その方向が逆向きである。合成語の場合は名詞が名詞として目立たなくなることが完全な合成語になる条件であるが、機能動詞結合においては名詞が、その意味内容が多い場合は特定の意味を押し出しつつ、独自性を保つことで機能動詞結合を可能にし、その重要な働きである動作態様の表現を保証している。というのは機能動詞結合は一つの動詞で表現されていたものが事柄の行われ方 (動作態様) を担う部分と事柄の内容を担う部分に、むしろ拡張されて一概念化されたものだからである。その意味では機能動詞は助動詞に近いので (Vgl. *Duden* 4, S. 112), 助動詞的動詞と呼び、それと結び付く意味成分を人称変化しない動詞形態として動詞的名詞と呼んで図式化すると A-2 のようになる。一方、意味成分は事柄の内容を担っている点で述語補足語に近いので (シュルツ/グリースバハ 487 ページ参照), それを表すと A-1 のようになる。

Anklang finden のタイプ



Anstoß an et.³ nehmen のタイプ



A-1, B-1において助動詞が現れない場合は動詞句が述語となる。つまり現実を現実として描写するとき「今、実際にそうである」という要素があるはずであるが、それは現在直説法という形をとり、助動詞は現在・過去以外の時称と語法性の必要があるときのみ用いられるからである。

Aでは語順の問題は起こらないが、Bでは前置詞句が機能動詞＋対格目的語を規定する位置に現れる場合と対格目的語だけを規定する位置に現れる場合がある。その他のタイプで他動詞＋対格目的語から生じた結合が与格目的語を要求する場合 (Er leistete der Aufforderung Folge. 「彼はその要求に従った」) や(5), (6)のタイプには、基本形としての揺れは見られず、元の構造の語順をとって枠構造を作る。但し(5)のタイプで動詞が sein の場合、前置詞句との枠構造よりも、名詞＋付加語の語順の方が強いものがある (in Angst/Sorge um jn. sein を参照)。

Ⅲ 機能動詞と直接結び付く対格目的語と二次的に結び付く前置詞格目的語の語順について

一般形において目的語としての名詞に冠詞が付く表現 (den Anstoß zu et.³ geben 「ある事のきっかけとなる」等) ならば、前置詞格目的語は付加語の位置に来るのが一般的である。

Dieses Ergebnis gab den Anstoß zur Revolution.

(*Duden* Bd. 2, S. 58)

「この事件が革命勃発のきっかけとなった」

しかし無冠詞の場合 (an et.³ Anstoß nehmen 「あるものに腹立ちを覚える」等) は一定していない。

Sie nahm Anstoß an seinem Benehmen. (『アポロン。』 S. 71)

「彼女は彼の態度に腹を立てた」

Sie nahm an seinem Benehmen keinen Anstoß.

(*Duden* Bd. 11, S. 45)

「彼女は彼の態度に腹は立てなかった」

一般形においても揺れのあるもの (an et.³ Anteil haben, Anteil an et.³ haben 「あることに関与している」等) がある。

Er hat keinen Anteil an diesem Erfolg. (『独和大。』 S. 144)

Wir haben an diesem Erfolg keinen Anteil. (*Duden* Bd. 11, S.46)

「彼／我々はこの成果に対してはなんらの貢献もしていない」

この章では一般形において無冠詞である対格目的語と前置詞句の基本語順とテーマ (Thema)・レーマ (Rhema) の関与について考察する。

[jm.] Anlaß zu et.³ geben 「〔ある人に〕ある事のきっかけを与える」に関して、それが文域 (Satzfeld, シュルツ／グリースバハ 435ページ以下参照) に現れた場合の語順を観察すると次のようになる。構造を簡略化し、機能動詞をV, 時称や話法の助動詞をv, 動詞的名詞をO, 前置詞句をP~, 前域 (Vorfeld) を.....で表すことにする。なお、今回はOとP~が代名詞によるものは除外する。

1. V O P ~ .

Seine Bemerkung gab uns Anlaß zu einem langen Gespräch.
「彼の発言がきっかけで長い話し合いとなった」(『アポロン。』S. 60)
Er gibt keinen Anlaß zum Tadel⁸.

「彼は非の打ちどころがない」

2. v O P ~ V.

Der Vorfall hat Anlaß zum polizeilichen Eingriff gegeben.

「この事件が警察の介入を招くきっかけとなった」

(『独和大。』S. 124)

Er hat mir nie den geringsten Anlaß zur Klage gegeben.

(*Duden* Bd. 2, S. 47)

「彼は私が苦情を言うきっかけを全く与えなかった」

3. V P ~ O.

(Er gibt zum Tadel keinen Anlaß.)

4. v P ~ O V.

Er hat zu den schlimmsten Befürchtungen Anlaß gegeben⁹.

「彼は最悪の事態を避けられなかった」

Ich möchte zu keiner Klage Anlaß geben. (Ibid.)

「できれば苦情は避けたい」

VとOの位置については 1., 2. はB-1に基づき, 3., 4. はB-2に基づいている。1. と 2. あるいは 3. と 4. の違いは、機能動詞が定動詞か不

定形かということによる動詞の位置の問題に過ぎないように見えるが、次の理由により、四つの場合に分けた。

機能動詞結合一般のOとP～の語順に関して

- (1) 基本語順を 1. とした場合、その割には 2. の頻度が低く 4. の頻度が高い。
 - (2) 基本語順が 1. と 3. のどちらであるかは句ごとに定まっているとした場合、その割には同一句に関して入れ替わりの頻度が高い。
 - (3) 基本語順は 1. と 3. のどちらとも句レベルでは決定できず、話者の意図するところにより語順が決まるとした場合、3. の頻度が 4. に比べて少ない。
3. の頻度が 4. より少ないことに着目して 3. の特徴を観察することから始める。

Er hat an diesem Erfolg tätigen Anteil. (*Duden* Bd. 2, S. 59)
Machen Sie bitte von dieser Mitteilung keinen Gebrauch.

(*Ibid.*, S. 286)

Er nahm an dem Gespräch keinen Anteil mehr. (*Ibid.*, S. 59)
Dies Verfahren findet in der Flugzeugortung und beim Fernsehen vielfache Anwendung. (*Duden* Bd. 4, S. 179)

Er hat über das Verkehrswesen rückständige Anschauungen.
(*Duden* Bd. 2, S. 52)

Er nahm an seinem Benehmen keinen Anstoß. (*Ibid.*, S. 58)

これらの例に代表されるように、3. の語順は P～のテーマ性と O のレーマ性がはっきりしている場合が多い。1. を基本語順とする表現があり、機能動詞が独立文において定動詞として現れるとき、O と P～のどちらにテーマ・レーマがあるかによって、1. の語順をとるか 3. の語順をとるかが決まると思われる。しかし、中には 3. の語順が定着したものがあり、その場合はテーマ・レーマによる語順の入れ替わりが 1. ほど容易ではないものとも考える。

3. V P ~ O.

Die Polizei machte von der Schußwaffe Gebrauch.

(*Duden* Bd. 11, S. 236)

Er nimmt von seinen Eltern Abschied. (*Duden* Bd. 2, S. 18)

Er nahm in Berlin Aufenthalt. (*Ibid.*, S. 71)

1. を基本語順としてもつものが 1. の語順をとらずに 3. の語順をとると述語が 2 分割されてレーマは動詞的名詞のみに来る.

1. V O P ~ .

→3. V P ~ (テーマ) | O (レーマ).

Nehmen Sie gar an dieser entblößten Brust aus Stein Anstoß?
(*Duden* Bd. 11, S. 45)

1. と 3. が 4. の語順をとると, OVがレーマとなるので動作態様もそれに参加することになる. 3. はVが後置されるだけで 4. の語順になる.

1. V O P ~ .

3. V P ~ O .

→4. v P ~ (テーマ) | O V (レーマ).

Der Politiker wollte dazu nicht Stellung nehmen.

(*Schülerduden*, S. 32)

Das Geschäft kann mit den Bedürfnissen unserer Zeit nicht mehr Schritt halten. (*Ibid.*)

Er hat kürzlich mit dem Rauchen Schluß gemacht.

(*Duden* Bd. 2, S. 591)

Ich habe von diesem schrecklichen Erlebnis noch keinen Abstand gewonnen. (*Ibid.*, S. 23)

Er hat von einer Anzeige Abstand genommen.

(*シュルツ*, S. 487)

1. が 2. の語順をとると, OP~V全体がレーマになり, 動作態様はその効果を増す.

1. V O P ~ .

→2. v | O P ~ V (レーマ+動作態様強調)

Er hat mehrere Anleihen bei Mozart gemacht.

(*Duden* Bd. 2, S. 48)

Unsere Sportler haben Anschluß an die Spitzenklasse erreicht.

(*Ibid.*, S. 54)

1. のVを移動させるだけだと 2. になるが、P～とOVがテーマ・レーマの関係で対比させられることが多く、4. の頻度が高くなるものと思われる。以上をまとめると次のようになる。

• 独立文において機能動詞が定動詞となる場合、

1. が基本語順である句は、OとP～のどちらにテーマ・レーマがあるかによって、1. の語順をとるか 3. の語順をとるかが決まる。

3. が基本語順として定着した句は、テーマ・レーマによって容易にはその語順を変えなくなる。

• 機能動詞が後置されるあらゆる場合、

1. が基本語順である句は、OP～Vがレーマである場合は 2. の語順を、P～にテーマ、OVにレーマがある場合は 4. の語順をとる。

3. が基本語順である句は常に 4. の語順をとる。

VI レーマ性の弱い対格目的語の動詞への接近

主文と副文、あるいは単純時称と複合時称の間の変換の際、動詞以外の要素は語順が変わらないのが原則であるが、自身で述語を形成し得る動詞が対格目的語をとるとき、それにレーマ性がなければ目的語が動詞に近づく傾向があるようである。例えば、Hast du mit deinem Freund den Platz getauscht? 「君は君の友人と席を交換したのか」(シュルツ, S. 346)という文の現在時称を考えた場合、それは Tauscht du mit deinem Freund den Platz? であろうか。これだと den Platz のレーマ性が強まり、den は指示代名詞ということになるが、元の文は指示代名詞とは限らない。むしろ訳文のように den は冠詞で den Platz tauschen がレーマであろう。では、Tauscht du den Platz mit deinem Freund? という文でも同じように mit deinem Freund の deinem の部分がレーマ化されるかといえば、一般的に言って、それはあまり考えられない。この場合は mit に導かれた前置詞句の中にあるので、deinem の部分だけがレーマ化されることは前置詞句全体がレーマ化されるよりも少ないであろう。しかし対格目的語はそれを支配する動詞と枠構造を作ると容易にレーマ化される。Tauscht du den Platz mit deinem Freund? という語順は前置詞句のレーマ化に限らず、den Platz のみのレーマ化を避けてい

る。tauschen という動詞を「ある物がある人と交換する」という意味で用いる時の基本語順は et. mit jm. tauschen であるが、このような基本語順は一般的に核となる動詞が独立文において定動詞として現れる場合の語順であり、副文や不定詞句等でそれが後置される構造においては、対格目的語の位置も独立文とは異なるのではないかと思われる。

Ⅲ章では独立文において機能動詞が定動詞となる場合の基本語順を 1. とし、語順の変化をテーマ・レーマの関与の点から観察した。しかし、2. や 4. のように機能動詞が文の構造上形式的に後置される場合、そのような理由だけからすべてを説明することは不可能である。機能動詞が独立文において定動詞として現れる場合と、その他の後置される場合とではそもそも基本語順が異なっているとすると、後者の場合は 4. が基本語順であると思われる。Ⅱ章で分離動詞と機能動詞結合の違いを考察したが、機能動詞句における対格目的語は独立文肢の資格を失っている点では分離前つづりと同じであるが、意味上は事柄そのものを表しているといつてよい点で前つづりと異なっていた。機能動詞 V が後置される場合、対格目的語 O が前つづりのように V の前に来る。この場合は O のみにレーマが置かれることが避けられる。4. を基本語順にした場合、2. の語順は P へのテーマ化を避けるためとも言えるだろう。一方、機能動詞が独立文において定動詞として現れる場合は、(前つづりと異なり) 意味上の独立性が強い対格目的語が文末に置かれると容易にレーマ化される。それを避けて基本語順が 1. になるものと思われる。

注

- 1 シュルツ／グリースバハ 『ドイツ文法』 稲木勝彦他訳, 1983年, 三修社, 431ページ以下参照。及び *Duden Bd. 4: Die Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*, 5. Aufl., Mannheim 1995, S. 605ff.
- 2 造語論では語構成の方法としての前つづりの付加 (Zusatz) と合成 (Zusammensetzung) は区別されるが、本稿では分離動詞の分離部分という意味で「分離前つづり」とした。従って合成動詞の分離部分も含まれる。
- 3 *Duden Bd. 2: Das Stilwörterbuch der deutschen Sprache*, 6. Aufl., Mannheim 1970, S. 46.
- 4 根本道也他編 『アポロン独和辞典』第2版, 1995年, 同学社, 71ページ。

- 5 国松孝二他編 『独和大辞典』, 1985年, 小学館, 1597ページ。
- 6 *Duden* Bd. 11: *Redewendungen und sprichwörterliche Redensarten*, Mannheim 1992, S. 767.
- 7 E. ヘンツェル/H. ヴァイト 『現代ドイツ文法の解説』西本美彦他訳, 1994年, 同学社, 80ページ, 及び *Duden* Bd. 4, S. 112.
- 8 濱川祥枝主幹 『クラウン独和辞典』, 1994年, 三省堂, 59ページ。
- 9 *Schülerduden. Übungen zur deutschen Rechtschreibung* II, Mannheim 1973, S. 33.

Die Wortstellung des Akkusativobjekts und seiner Ergänzung im Funktionsverbgefüge.

Chiko HANEDA

Inhaltsübersicht :

- I Die Ergänzung als Objekt und die Prädikatsergänzung
- II Die Kategorie des Substantivs im Funktionsverbgefüge
- III Die Wortstellung im Funktionsverbgefüge in Hinsicht auf Thema und Rhema
- IV Die Annäherung eines nicht (stark) rhematisierten Akkusativobjekts ans regierende Verb.

Das die Struktur des Satzes bestimmende Prädikat kann ein- oder mehrteilig sein. Bei einem mehrteiligen Prädikat kommen in Verbindung mit dem Finitum infinite Verbformen oder ein Verbzusatz vor. Im Funktionsverbgefüge kommt es dann in Frage, in welche Kategorie die mit einem Funktionsverb verbundenen Elemente (Akkusativobjekt oder Präpositionalgruppe) einzuordnen sind. Sie werden als Prädikatsergänzungen oder Prädikatsteile betrachtet, wenn sie als Hauptsinträger des Prädikats dienen, während Funktionsverben das Prädikat nicht allein bilden können. Als Prädikatsteile können sie dann infinite Verbformen oder ein Verbzusatz sein. Funktionsverbgefüge sind den Verbzusammensetzungen von Substantiv + Verb oder (aus Präpositionalgefügen hervorgegangenes) Adverb + Verb zwar insofern verwandt, als das Akkusativobjekt oder die Präpositionalgruppe im Verbund mit dem Verb ihre syntaktische Selbständigkeit verliert. In semantischer Hinsicht aber verhalten sich die beiden etwas anders. Für

1. V O P ~ .
2. v O P ~ V.
3. V P ~ O.
4. v P ~ O V.

Der Wechsel zwischen 1 und 3 nach Thema-Rhema tritt beim Gefüge mit der Grundwortstellung 1 leichter ein als beim Gefüge mit der Grundwortstellung 3. Die Wortstellung 4 kommt öfter vor als 2, einerseits zur Gliederung: Thema (P~) und Rhema (OV), andererseits infolge der Bewegung von O durch die Anziehungskraft von V. Zur Vermeidung der Thematisierung von P~ kommt dabei die Wortstellung 2 in Betracht.